

太宰治の竹林七賢観

劉, 金宝

九州大学大学院比較社会文化研究院 : 特別研究者

<https://doi.org/10.15017/1654283>

出版情報 : *Comparatio*. 19, pp.11-23, 2015-12-28. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン :
権利関係 :

太宰治の竹林七賢観

劉 金宝

はじめに

竹林七賢とは、魏晋時代に老荘（道家）思想を尊び、世俗を避け、自由を樂しんだ七人の隠者のことである。阮籍、嵇康、山濤、劉伶、阮咸、向秀、王戎の七人は竹林に集まり、酒を飲みながら、清談（注一）をしていたという。曹操の子であつた曹丕が設立した魏王朝は、景初三年（二三九年）、魏明帝の死去とともに、衰退の一途をたどつた。明帝の死から十年経つた正始十年（二四九年）、魏の実力者の司馬懿は激しい権力闘争に勝ち、実権を掌握するようになる。その司馬懿の死後、長男の司馬師と次男の司馬昭が敵対勢力を抹殺し、魏王朝の篡奪を推し進めた。泰始元年（二六五年）司馬昭の長男、司馬炎が魏を滅ぼして西晋王朝を設立した。竹林七賢はこのような激動の時代を生きたものである。

太宰治の随筆や書簡に竹林七賢に関する言及が見られる。それでは、太宰治は竹林七賢に対して、どのような認識を持っていたのだろうか、ひいてはその竹林七賢観が何に由来しているのだろうか。このことは、太宰治の世界観と素材の生かし方とも関わっており、先行研究でも言及されていないため、本稿ではこの問題について考察してみたい。

一、太宰治の竹林七賢観

太宰治の随筆や書簡には竹林七賢への言及が幾つかあり、それは次のようなものである。

①むかし、支那に竹林の七賢人といつて、知ること最上、つひに竹藪の中に隠れ、日々、淫酒、手を拍つて笑ひ、さうして餓死した人たちがあつたさうですね。賢人も、竹藪へはひつてしまへば、それきりです。（『昭和十年九月三十日付 齋崎潤宛書簡』、引用は『太宰治全集』第十二巻、筑摩書房、一九九九年四月、五五頁に拠る。）

②竹林の七賢人も藪から出て来て、あやうく餓死をのがれん有様。（『もの思う葦（その二）』、昭和十年十二月、引用は『太宰治全集』第十一巻、筑摩書房、一九九九年三月、二九頁に拠る。）

③竹林の七賢人は藪より出づべし、出でてわが身を都塵にまみれさすべし。『新潮』のアンケート「作家としての心構へ・覚悟」、昭和十一年一月、引用は『太宰治全集』第十一巻、筑摩書房、一九九九年三月、四五四頁に拠る。）

これらの太宰治の言及を基にして、彼の竹林七賢観をまとめてみ

たい。

(一) 竹林に隠逸している。

鯨崎潤宛書簡における「つひに竹藪の中に隠れ」やアンケート「作家としての心構へ・覚悟」における「竹林の七賢人は藪より出づべし」という表現から、七賢人が竹林に隠逸していたと、太宰が考えていたことがわかる。

(二) 餓死するほど貧しい。

鯨崎潤宛書簡における「さうして餓死した人たちがあつたさうですね」や「もの思う葦(その二)」における「あやうく餓死をのがれん有様」という表現から、七賢人が餓死するほど貧しいというように太宰が認識していたと言えるだろう。

つまり、竹林に隠逸し、貧しい生活を送っていたという太宰の竹林七賢観が浮かび上がってくるのである。

二、太宰治の竹林七賢観の一面性

それでは、次に太宰の竹林七賢観が事実と符合するかどうかについて、「晋書」(注二)における関連の伝記や「世説新語」(注三)などの文献や先行研究に基づいて、考察してみたい。

(1) 竹林に隠逸していたかどうかについて

隠逸(隠者、隠士、逸民、逸士、隠君子とも呼ばれる)の概念は、研究者によって違うようである。例えば、島内裕子が「隠遁」とは、狭く仏教の僧侶の生き方を指すだけでなく、出家しなくとも俗世間を離れて、自分自身の価値観に基づいて生きる生き方で

ある」(『本朝遷史』と『扶桑隠逸伝』にみる隠遁像)、『放送大学研究年報』第十四号、一九九六年十一月、四四頁)と指摘しているのに対して、小林昇は「隠逸(隠士、逸民)はもともと仕官を求めない人人、またはそれをすてざる人人を指したのである」(『中国・日本における歴史観と隠逸思想』早稲田大学出版部、一九八三年一月、二九四頁)と考えている。本稿においては、中国語では隠逸と仕官が対照的に使われていることを踏まえて、小林昇の説に従い、隠逸とは官吏になる条件を満たす人が出仕を求めないで、または仕官を離れて隠居することを意味しているものとして捉えている。隠逸したあとに出仕する場合もあれば、逆に、出仕を離れたあとに隠逸する場合も見られる。陶淵明のように、出仕と隠逸を繰り返した人物も存在する。また、隠逸する場所については、山林、市井や自宅などが挙げられる。「学而優則仕」(学問をしている者は、学問が十分進んで、余力があるようになったら、はじめて出て仕えて、その学んだところを実行に移すべきだ。(注四)といった儒家思想の影響により、出仕は歴代の知識人の求めていたものだったと言ってもよい。それに対して、中国の隠逸の特徴は、自ら出仕を求めようとしない点にある。

隠逸は中国歴史や文化で重要な地位を占めているものである。正史と認められる「二十四史」(注五)の中では、「後漢書」や「晋書」から「明史」に至るまで十四の史書に隠逸の伝記があることから、中国の歴史における隠逸の重要性が伺われる。堯から天子の位を譲られ、それを辞退した許由は、中国で最も古い隠者であるとされている。それ以降の数千年の歴史において、つねに隠

逸の姿が見受けられるのだ。隠逸の動機は人によってそれぞれ違うが、治世には出仕するのに対して、乱世には隠逸するという儒家の保身思想の影響が甚大だったと言わざるを得ない。また、漢代になると、儒教は正統思想として高められ、三綱五常をはじめとする系統的礼教が形成された。中でも国家支配のイデオロギーとしての忠孝思想が、支配者により確立されている。その影響をうけ、政権交代にあたり、旧王朝への忠誠を尽くすため、新王朝への出仕を固く拒否する人が隠逸に入るのはよく見られることであつた。

次に竹林七賢の代表格であつた阮籍と嵇康の隠逸の動機について、述べてみたい。

阮籍の隠逸の動機については、「阮籍伝」（『晋書』）に、「魏と晋の交替期にあたり、凄惨な事件が頻発して、名士の中で生命を全うする者が少なかったため、世事に関わらないで、大酒飲みを事とするようになった」（属魏晋之祭、天下多故、名士少有全者、籍由是不与世事、遂酣飲為常。）（注六）と書いてある。治世なら出仕し、乱世なら隠逸するという儒家の保身思想が彼の隠逸の主因だと思われる。

嵇康の場合は、山滔が吏部郎より散騎常侍に昇進する際、後任に嵇康を推挙したところ、嵇康は山滔に絶交の手紙（『与山巨源絶交書』）を出して、それを固く拒絶した。彼の隠逸の動機は、山滔宛の手紙であつた「与山巨源絶交書」における下記の記述にあると考えられる。

恐足下羞庖人之独割、引屍祝以自劬。

近ごろ、あなたが昇進されたことを聞き、私はびくびくして心が晴れません。というのは、（祭祀のとき）調理人が自分ひとりで犠牲を裂くのを恥じて、神主を引っぱってきて、手伝わせようとし、鸞の鈴飾りをつけた刀をさし出して、神主を血なまぐさいものでけがそうとするのと同様のことを、あなたがなさるのではないかと思うからです。（『中国の古典』第二四卷『文選下』、学習研究社、一九八五年一月、一二二頁。）

ここでは、山滔を、祭祀用の動物を殺したり、裂いたりする調理人に譬えている。魏の民として魏の政権を篡奪した司馬氏に協力して出仕するのは汚い事であるとして、司馬氏に仕えている山滔を嘲笑しているのである。ここでは、嵇康の旧王朝の魏への忠誠が読み取れるであろう。つまり彼の隠逸の主因は、儒家思想で唱えられているような朝廷への忠誠を尽くすためである。結局、嵇康は司馬氏による晋王朝への出仕を拒絶して、司馬氏に殺されたのも彼の忠誠心の裏づけではないだろうか。

一方、竹林七賢における竹林については、各文献で次のように記述されている。

「三国志」で引用されている「魏氏春秋」（逸書、東晋の孫盛の著である。）：康寓居河内之山陽縣、與之游者、未嘗見其喜愠之色。與陳留阮籍、河内山滔、河南向秀、籍兄子咸、琅邪王戎、沛人劉伶相與友善、遊於竹林、號為七賢。（『三国志』第

三冊、中華書局、一九七三年一月、六〇六頁。）

「世説新語」…七人常集于竹林之下、肆意酣暢。故世謂竹林七賢。（井波律子訳注『世説新語』第四卷、平凡社、二〇一四年五月、一三〇頁。）

「嵇康傳」（『晋書』）…「竹林之游」

「王戎傳」（『晋書』）…「竹林之游」

「阮咸傳」（『晋書』）…「竹林之游」

陳寅恪は「陶淵明之思想與清談之關係」（注七）において、この竹林は仏陀が布教する場所であった「竹林精舎」の「竹林」に由来すると主張し、竹林の存在を否定した。それに対して、王曉毅

（『竹林七賢考』、『歴史研究』、二〇〇一年五月）は「史記」（注八）

や「水経注」（注九）などの文献を踏まえながら、実地調査を経て、七賢のリーダー格の嵇康の旧居であった山陽に存在した竹林の存在を証明した上で、竹林七賢の伝説の由来について、「竹林七賢の伝説は捏造したものではなく、おそらくある時、七人が揃って竹林に集まったことに基づいたものである。集まった時期は正始九年（二四八年）の可能性が高い。二四八年には七人が誰も官職に就いていなかったため、山陽に揃って集まることができる。一方、高平陵政変（二四九年）以後、阮籍は嘉平元年（二四九年）から司馬懿に事中郎に招かれ、七人が揃って竹林に集まるのは難しいであろう。」（注一〇）と述べている。ここで、竹林を七人が集まる場所として考えている点に注意すべきであろう。范寿康（注一一）も竹林を集まる場所として考えており、王曉毅と同じ

立場である。「魏氏春秋」における「遊於竹林」（「竹林に遊宴する」）、「世説新語」における「集于竹林」（「竹林に集まる」）や「晋書」における「竹林之游」（「竹林での遊宴」）を考え合わせて見ると、竹林は隠逸する場所ではなく、一時的に集まるための場所に過ぎないと言えるであろう。

七人の隠逸する場所については、「晋書」や「世説新語」などの文献に明言されていないが、七人の居住地だったと推測される。それは、それほど有名な隠者として、山林や市井などに隠逸したならば、「晋書」や「世説新語」などの文献にまったく触れられないはずはないだろうからだ。七人の居住地について、王曉毅の「竹林七賢考」を踏まえて、次のようにまとめることができる。

嵇康と王戎

「嵇康傳」（『晋書』）における「戎自言與康居山陽二十年。」（『晋書』第五冊、中華書局、一九七四年十一月、一三七〇頁）という記述から、嵇康と王戎の住居が河内郡山陽県（今の河南省焦作、修武附近（注一二））にあることがわかる。

山濬

「山濬傳」（『晋書』）における「山濬字巨源、河内懷人也。」（『晋書』第五冊、中華書局、一九七四年十一月、一二三三頁）という記述から、山濬の住居が山陽県南に隣接する河内郡懷県（今の河南省武陟県）にあることがわかる。

向秀

「向秀傳」（『晋書』）に「向秀字子期、河内懷人也。」（『晋書』第五冊、中華書局、一九七四年十一月、一三七四頁）という記述

や「余與嵇康、呂安居止接近。」(『晋書』第五冊、中華書局、一九七四年十一月、一三七五頁)という記述がある。向秀の住居も河内郡懷県にあり、嵇康の隣に住んでいたことがわかる。

劉伶

劉伶の住居については、文献に記載されていないが、彼の墓は山陽県、懷県と隣接する獲嘉県にあるため、住居もその周辺にあると推知できる。

阮籍と阮咸

「水経注」(「穀水」の項)に「穀水又東南。転屈而東注。謂之阮曲云。阮嗣宗之故居也。」(『水経注』、世界書局、一九六五年六月、二一九頁)と書いている一方、「阮咸傳」(『晋書』)に「咸與籍居道南、諸阮居道北。」(『晋書』第五冊、中華書局、一九七四年十一月、一三六二頁)という記述があるため、阮咸と阮籍は共に、洛陽(穀水)附近に住んでいたはずである。

つまり、嵇康、山濬、王戎、向秀、劉伶の五人が河内郡山陽県及びその周辺に住んでいたことになる。その一方で、阮籍と阮咸は山陽から遠く離れた洛陽に居を据えていた。

普段、それぞれの居住地付近で活動しながら隠居し、特定の時期(例えば王暉毅の指摘した二四八年)あるいは、たまに(阮籍と阮咸の居住地は山陽から遠いので、よく集まることは出来ないであろう)、リーダーである嵇康の住んでいる山陽に集まって、そこにある竹林で遊宴したのだろう。

何れにせよ、竹林は、彼らが酒を飲みながら、当時盛んに行われていた清談を行うために集まる場所に過ぎず、隠逸するための

場所ではなかったのだ。七人がそろって竹林に隠逸しているという太宰の認識は、事実とずれていると言わざるを得ない。

(2) 餓死するほど貧しかったかどうかについて

七人の貧しさに関する記述は「晋書」に見られない。一方、阮籍の務めた官職には、尚書郎、参軍、大司馬從事中郎、散騎常侍、大將軍從事中郎などがある。嵇康は中散大夫を務めたことがある。阮咸は散騎侍郎を経て始平太守に就いたまま死んだ。向秀は散騎侍郎などを経て散騎常侍に就いたまま死んだ。王戎と山濬は、いずれも当時の最高級の官職の司徒である。劉伶も建威参軍に就いたことがある。七人は皆、官吏なので、貧しいはずはないだろう。

阮籍、阮咸、向秀、王戎と山濬はいずれも官職に就いたまま死んだが、嵇康は協力を拒否して司馬氏に殺された。劉伶だけが無官のまま死んだ。餓死するほど貧しいという太宰治の認識は事実とかなりずれていると言わざるを得ない。

貧しさについても、隠逸する場所についても、太宰の七賢への認識は一面的なものと言わざるを得ないであろう。なぜ、こういう一面的な竹林七賢観を持ったのか(注一三)と云えば、太宰が自身の隠者観を竹林七賢に当て嵌めたのではないかと考えられる。

三、太宰治の隠者観

(一)、伯夷、叔斉と寒山

上記の「鯨崎潤宛書簡」における「さうして餓死いたした人たちがあつたさうですね。」という太宰の言及は興味深い。中国で餓

死した隠者と言えば、最も有名なのは伯夷と叔斉である。伯夷が兄、叔斉は弟で、孤竹という国の君主の息子であった。父の死後、お互いに君主の位を譲り合って、跡を継がなかった。紀元前一〇〇〇年頃、周の武王が、殷の紂王を武力によつて倒そうとする時、兄弟は武王の馬を叩いて、諫めたが、受け入れられなかった。天下が周のものとなった後、伯夷叔斉は新王朝の周の粟を食うのを恥じて、首陽山に隠居し、蕨を取つて命を繋いだ、やがて餓死した。

「日本近代文学館所蔵 太宰治自筆資料集」に、太宰治の中学一年時（旧制青森中学校、一九二三年四月～一九二四年四月）に使った漢文教科書ガイドであつた岡田正之編『新定漢文読本詳解』（東京辞書出版社、一九一七年六月）巻一が見える。つまり、太宰の中学時代に使った漢文教科書は岡田正之編『新定漢文読本』（開成館、初版一九一一年十二月）だったのである。岡田正之編『新定漢文読本』第四巻「伯夷・叔斉」には、次のように書いてある。

武王載木主、号為文王、東伐紂。伯夷・叔斉叩馬而諫曰、「父死不葬、爰及干戈。可謂孝乎。以臣弑君、可謂仁乎。」左右欲兵之。太公曰、「此義人也」。扶而去之。武王已平殷乱、天下宗周。而伯夷・叔斉恥之、不食周粟。隱於首陽山、採薇而食之（中略）遂餓死於首陽山。（岡田正之編『新定漢文読本』第四卷、開成館、一九一六年十二月、三六頁。）

ここでは、首陽山に隠居し、周王朝の粟を食わず餓死したという伯夷叔斉の言動が明記されている。二人の隠逸する場所が首陽山にあることや、生活状態における「餓死」が注意すべき点であろう。

また、中国唐代の隠者の寒山も看過できないものである。昭和十年十月に刊行された太宰治の随筆「もの思う葦（その一）」の一節「塵中の人」において、次のような表現がみられる。

寒山詩は読んだが、お経のようで面白くなかった。なかに一句あり。

悠悠たる塵中の人、
常に塵中の趣を楽しむ。

「悠悠たる」は嘘だと思いが、「塵中の人」は考えさせられた。『太宰治全集』第十一巻、筑摩書房、一九九九年三月、一六頁。）

まず、太宰治の読んだ寒山詩の版本について、考察してみたい。寒山詩は非常に複雑な詩風を有する。中でも「痴癡根本業、無明煩惱院。輪廻幾何劫、祇為造迷盲。（愚痴は根本の業因による、恐るべし無明煩惱のあな。輪廻も幾劫、ただ迷妄の業による。）」（延原大川『平訳寒山詩』、明徳出版社、一九六一年十月、一七九頁。）というような、仏法を説いたところにその特徴があるため、太宰治は「お経のようで」という評価を出したのではないか。また、項楚が『寒山詩注』（中華書局、二〇〇〇年三月）で指摘した

ように、寒山詩は白話詩に属する。つまり、「猪喫死人肉、人喫死猪腸。猪不嫌人臭、人返道猪香。(ぶたは死人の肉を食い、人は死にたるぶたの腸を食う。ぶたは人の臭きをいとわず、人はぶた肉の香ばしきをいう) (延原大川『平訳寒山詩』、明德出版社、一九六一年十月、六一頁。)」というような口語や俗語が混じっている詩が多いので、太宰治は一定の漢文力を有しても、訳注に頼らざるを得なかつたと思われる。

筆者の調査した限り、「塵中の人」が刊行された昭和十年十月までには、訳注の寒山詩としては、釈清潭注釈の『寒山詩新釈』(国光社、一九〇七年十月)、井土靈山訳の『ポケット寒山詩』(二松堂、一九一一年四月)、毛利湛然注釈の『寒山詩評釈』(禅世界社、一九一七年一月)と太田悌蔵訳注の『寒山詩』(岩波書店、一九三四年十月)などが出版されていた。

太宰治の「塵中の人」を読んでみると、題目を含め、「塵中の人」という表現は三回にわたり登場していることが注目すべきであろう。上記の各書におけるこの詩句は次のようになってい

釈清潭『寒山詩新釈』：「悠悠塵裏人、常樂塵中趣。」(二四五頁)
井土靈山『ポケット寒山詩』：「悠々たる塵裡の人、常に塵中の趣を樂しむ。」(二六三頁)

毛利湛然『寒山詩評釈』：「悠々塵裡人、常樂塵中趣。」(二五一頁)

太田悌蔵『寒山詩』：「悠悠たる塵中の人、常に塵中の趣を樂しむ。」(二五八頁)

釈清潭『寒山詩新釈』、井土靈山『ポケット寒山詩』や毛利湛然『寒山詩評釈』のいずれにおいても「塵中の人」ではなく「塵裏(裡)の人」と記されている。また、項楚『寒山詩注』にも「悠悠塵裏人、常樂塵中趣」(九三二頁)と書かれている。ここにおける「塵裏」と「塵中」は同じ意味で、世間を指すのであろう。周知のように、中国の古詩では言葉遣いの重複を避けるという傾向があるため、後ろの「塵中趣」における「塵中」との重複を避けるため、「塵中人」ではなく、「塵裏人」にされたと思われる。それに対して、太田悌蔵訳注の『寒山詩』では、「悠悠たる塵中の人、常に塵中の趣を樂しむ」と訳されており、「塵中」という言葉の重複があるので、誤記の可能性が高いだろう。太宰治も太田悌蔵の訳文と全く同じで、「塵中の人」と表現しているのは太田悌蔵訳注の『寒山詩』を読んで、太田悌蔵の誤記をそのまま踏襲したためであろう。つまり、太宰治はどちらを読んだのかと言え、太田悌蔵訳注の『寒山詩』だと思われる。

太田悌蔵訳注の『寒山詩』における閩丘胤の「寒山子詩集序」では、寒山の行状を次のように述べている。

且た状貧子の如く、形貌枯悴なり。(中略)布裘破弊、木屐地を履む。(中略)縣の界の西七十里の内に當たり一巖有り、巖中に古老より貧士有るを見る。(九〇一頁)

隠逸する場所は天台山の岩窟にある一方、「貧子」や「布裘破弊」

や「貧士」などの表現が寒山の貧しさを物語っていると思われる。つまり、太宰の知るかぎりの中国隱者の伯夷、叔斉や寒山はいずれも山林に隱居して、貧しい生活を送っていた。

(二)、日本の隱者

中国では、遁世人といえ、隱者の意味であり、出家は仏門に歸依することとされており、兩者が区別されている。一方、日本では、はじめは大江朝綱の「賦落花乱舞衣応太上法皇製詩序」(注一四)や菅原輔昭の「賦隔花遥勸酒応太上法皇製詩序」(注一五)における「遁世」のように、天皇の位を離れるという、中国の隱逸とほぼ同じ意味で使われていたが、平安朝時代の後半に入り、慶滋保胤の「為二品長公主四十九日御願文」(注一六)における「遁世」を皮切りに、遁世が出家の同義語として用いられるようになった。このような遁世の意味をめぐる中国と日本の差異について、小林昇は次のように指摘している。

利養を捨て去るといふ点では出家も隱士も同じであるが、中国で遁世人といえ、隱士があげられるほど、遁世には伝統的觀念が絡んでおり、出家が仏語として新たに用いられても、それによって混乱が生じなかつたからなのである。隱士は一般に熟知されており、出家とは別のものと考えられていたからである。我が国には隱士とよばれる者が実際に存在したわけではなく、書物の上の知識から隱士を胸中に描いたのであり、出家して山林に修行することが隱士の生活に類似すると見たことが、

兩者に親近感を抱かせ、遁世を出家のような意義に転化させたのであろうか。(『中国・日本における歴史観と隱逸思想』、早稲田大学出版部、一九八三年一月、三五―頁)

つまり、中国では、隱逸が先に現われて、定着した後に、仏教が伝わってきたため、遁世と出家とははっきり区別されている。それに対して、日本では、隱逸への憧憬が山林を志す修行僧に投影され、修行僧が隱士のような性格を持つものとされ、また、出家と遁世を同義語として重ねて「出家遁世」と四字熟語として使われている。

江戸時代になると、職業に関係なく風雅風流に暮らす人物が隱者と見られるようになる。中国の隱者を、出仕を離れ、詩文に逃れた者と理解した浪人、つまり名家を失った武士が隱者と自称し、山林や市井に居ながら、詩歌などの文学活動に励み、貧にあつて名利を離れる氣風が出来た。林靖の「本朝遁史」や元政の「扶桑隱逸伝」など、武士による隱者の伝記が相次いで著されている。また、新しい文学氣運の隆興につれて、俳人や戯作者にも隱者と自称する人々が現われるようになった。

日本隱者の隱逸する場所

放浪隱者として有名な西行は鞍馬山や高野山などで草の庵を結んだことがある。鴨長明も東山や大原や日野山で、兼好も比叡山で庵を結んで、山に住居を構えた。日本で最初の隱者伝記である「本朝遁史」の冒頭には「士は山林を忘れず。故に仕へず、故に

帰田す。故に官を辞し、故に骸を乞ふ（注一七）という林靖による序文がある。ここで、隠逸の主体は「士」であり、隠逸する場所には「山林」とされる。

また、身分を問わず、誰も隠者と自称する、つまり隠者が氾濫する江戸時代の気風の中で、井原西鶴の「万の文反古」中の「桜よし野山難儀の冬」では、本文の後に「物好きに出家したものと思われる。山住いに退屈して、還俗の気持になっている。世間にはこういう無分別なものが大ぜいいる」（『古典日本文学全集』第三卷、麻生磯次訳『井原西鶴集（下）』、筑摩書房、一九六〇年十二月、三四四頁）という批評がある一方、本居宣長の随筆「玉勝間」には次の一文がある。

世々の物知り人、又今の世に学問する人などもみな、すみかは、里とほくしづかなる山林を、住よくこのましくするさまにのみいふなるを、われはいかなるにか、さらにさはおぼえず、たゞ人げしげくにぎは、しきところの、好ましくて、さる世ばなれたるところなどは、さびしくて、心もしをるゝやうにぞおぼゆる、さるはまれまれにものして、一夜たびねしたるなどこそは、めづらかなるかたに、おかしくもおぼゆれ、さる所に、つねにすまゝほしくは、さらにおぼえずなむ、人の心はさまざまなれば、人うとくしづかならむところを、すみよくおぼえむも、さることにて、まことにさ思はむ人も、よには多かりぬべけれど、又例のつくりことの、漢ぶりの人まねに、さいひなして、すべての世の人の心と、ことなるさ

まに、もてなすたぐひも、中には有ぬべくや、かく疑はるゝも、おのが俗情のならひにこそ。（村岡典嗣校訂『玉勝間（下）』、岩波書店、一九七六年十一月、一五一頁。）

当時の隠者が隠逸する場所は主として山林に据えていたと考えられる。昭和十年十月に刊行された太宰治の随筆「もの思う葦（その一）」の一節「塵中の人」には、次のようにある。

玉勝間にもこれあり。

「世々の物知り人、また今の世に学問する人なども、みな住みかは里遠く静かなる山林を住みよく好ましくするさまにのみいふなるを、われは、いかなるにか、さはおぼえず、ただ人繁く賑はしき処の好ましくて、さる世放れたる処などは、さびしくて、心もしをるやうにぞおぼゆる。云々。」（『太宰治全集』第十卷、筑摩書房、一九八九年六月、五五〇五六頁。）

ここでは、本居宣長の山住みに関する見解がそのまま引用されている。

歴史上の代表的な隠者はいずれも隠逸する場所を山林に据えていた。本居宣長の山住みに関する見解を読んで、太宰が日本隠者の隠逸する場所が主に山林にあると思つたのは当然だろう。

日本隠者の生活状態

小林昇が指摘したように、隠者を描いた貧乏物語がしばしば見

られる。例えば、鴨長明の「発心集」の冒頭では、有名な隠者である玄賓と平等供奉の様子は次のようにある。

玄賓：この舟の渡し守を見ると、髪は手でつかめるほどにのびて、薄汚い麻衣を着た法師であった。（『鑑賞日本古典文学』第二三卷『中世説話集 古今著聞集・発心集・神道集』、角川書店、一九七七年五月、一五二〜一五三頁。）

平等供奉：さて伊予の国で、彼はいつとなくふらふらとさまよい歩いて、乞食をして日を暮らしたので、この国の人々は、彼に門乞食という名を付けたのだった。（中略）とても人間の姿とは思えないほどに痩せ衰え、ぼろがひらひらしている継ぎ合わせだけを着て、まことにみすばらしい。（『鑑賞日本古典文学』第二三卷『中世説話集 古今著聞集・発心集・神道集』、角川書店、一九七七年五月、一六二頁。）

引用部を読んでもみると、二人が貧しいことは言うまでもないことである。「本朝遼史」にも、松の実を食べていた民黒人や今日の生計も立てられないほど非常に貧しい生活を送っていた藺翁が登場する。また、伴蒿蹊の「近世畸人伝」（序文によると初め隠士の伝を集録する予定であったが、畸人伝にしたという）にも次のような貧乏な隠者が登場する。

桃山隠者：伏見桃山に乞丐のごとくわらむしろをもてかこひ

たるものして住人あり。（宗政五十緒校注『近世畸人伝・続近世畸人伝』、平凡社、一九七六年三月、一二三頁。）

森金吾：「終に四十近き比致仕し、故郷に帰り、只膝を容る斗の庵を結び、糶汰瓶をもたくはへず、蕎麦の粉をもて朝夕の飢を凌ぐ。」（宗政五十緒校注『近世畸人伝・続近世畸人伝』、平凡社、一九七六年三月、一三八頁。）

日本では、貧は隠者と密接に繋がっていることが伺える。小林昇の「貧は隠者の宿命のようである」（『中国・日本における歴史観と隠逸思想』、早稲田大学出版部、一九八三年一月、三七一頁）や、杉浦明平の「日本の隠者は、精力気力不足から俗世間から落伍した連中で、貧しさが一つの看板となっていたこと、鴨長明以来すこしも変わらない」（『日本の隠者、中国の隠者』、『国文学解釈と教材の研究』第十九卷第十四号、一九七四年十二月、七四頁〜七五頁）といった認識は日本人の普遍的認識だったのだろう。太宰が同じ日本人として、日本の隠者が貧しいという、小林昇や杉浦明平などと同じ認識を持っていても、何の不思議もないだろう。

また、時期がやや遅れるが、昭和二十年一月に発表された太宰治の「吉野山」は注意すべき作品である。無用の発心で出家遁世した偽隠者を揶揄するもので、吉野山に遁世した主人公がお金に困り、昔の友達に助けを求める手紙という設定である。本文末尾に書かれているように、この作品は、井原西鶴の「万の文反古」

中の「桜よし野山難儀の冬」の翻案である。しかし、原典の「桜よし野山難儀の冬」に主人公の貧しさに関する描写がないのに対して、太宰の「吉野山」に「遁世してこのようにお金がかかるものとは思ひも寄らず、そんなにお金も持って来ませんでしたので、そろそろ懐中も心細くなり、何度下山を思い立ったかわかりません」(『太宰治全集』第六卷、筑摩書房、一九九六年七月、四一七頁)や「ここを立ちのくにしても、里人への諸支払いがだいぶたまって居りますし、いま借りて使っている夜具や炊事道具を返すに当たってもまた金銭のややこしい問題が起るのではなからうかと思えば、下山の決心もにぶります。」(『太宰治全集』第六卷、筑摩書房、一九九六年七月、四一七〜四一八頁)というように、主人公の貧しさに関する表現があることから、日本の隠者が貧しいという認識を太宰が持っていたと伺えるだろう。こういう認識に基づいて、原典になかった、主人公の貧しさに関する描写を「吉野山」に付け加えたのではないだろうか。

つまり、太宰の知る限りの伯夷、叔斉や寒山などの中国隠者がいずれも山林に隠居して貧しい生活を送っていた一方、日本の有名な隠者らも皆、山林に隠居したり、貧しい生活を送ったりしていたので、中国の隠者でも日本の隠者でも皆、山林に隠居して貧しい生活を送っているという隠者観を、太宰が持っていたのは当然だろう。太宰のこのような隠者観と、竹林に隠逸し、貧しい生活を送っているという彼の竹林七賢観とは、隠逸する場所や生活状態において共通するのは偶然であるというより、むしろ竹林七賢が隠者であることを太宰が知っていたため、山林に隠居して、

貧しい生活を送っているという隠者観を太宰がそのまま竹林七賢に当て嵌めたと言ったほうが妥当だろう。

終わりに

太宰の知る限りの伯夷、叔斉や寒山などの中国隠者や、日本の代表的な隠者はいずれも山林に隠居して貧しい生活を送っていたため、隠者は主として山林に隠居して貧しい生活を送っているという隠者観を太宰は持っていた。一方、太宰は竹林七賢が隠者であることを知っていたため、自身の隠者観をそのまま竹林七賢に当て嵌めて、事実上、それぞれの居住地付近に隠居し、特定の時期あるいはたまに、嵇康の住んでいる山陽にある竹林に七人が集まっていたに過ぎないのに、隠逸する場所を竹林(竹林七賢という普遍的呼称も太宰が七人の隠逸する場所を竹林と即断した一因であろう。)と誤解したり、事実上は貧しくない官吏であったはずだが、餓死するほどの貧者と誤解したりすることで、事実とはかけ離れる竹林七賢観を持ったと思われる。

注記

(一) 中国の魏晋時代に流行した論理性を重視する談論で、清談・玄談ともいう。源は後漢末、在野の土の間で行われた人物批評(清議)に由来する。その主たる内容は抽象化、類型化された人物論、三玄(「易経」、「老子」、「莊子」)に基づく形而上的言論である。老荘思想を鼓吹して清談の気風を

隆盛に導いたのは何晏と王弼である。次いで登場した竹林の七賢は儒家的礼法を無視した言動を志向し、清談派の典型の一つとなっている。

(二) 二十四史の一つ。晋代の正史である。唐の太宗の時、房玄齡らの奉勅撰。帝紀十卷、志二十卷、列伝七十卷、載紀三十卷よりなる。

(三) 南朝宋の劉義慶の編で、後漢から東晋に至る貴族・学者・文人・僧侶などの德行・言語・文学などに関する逸話を三十八門（または三十六門）に分類し収録した書である。

(四) 『新釈漢文大系』第一巻『論語』、明治書院、一九六〇年五月、四一八頁。

(五) 「史記」や「漢書」から「旧五代史」や「明史」に至るまでの二十四部の正史の総称。清の乾隆（一七三六―一七九五）の時代に、勅令によって選ばれたものである。

(六) 『晋書』第五冊、中華書局、一九七四年十一月、一三六〇頁。所謂「竹林七賢」者、先有「七賢」、即取論語「作者七人」

之事数、実与東漢末三君八廚八及等名同為標榜之義。迨西晋之末僧徒比附内典外書之「格義」風氣盛行、東晋初年乃取天竺「竹林」之名加於「七賢」之上、至東晋中葉以後江左名士孫盛袁宏戴逵輩遂著之於書、(魏氏春秋竹林名士傳竹林名士論。)而河北民間亦以其說附会地方名勝、如水經注瓊清水篇所載東晋末年人郭緣生撰著之述征記中嵇康故居有遺竹之類是也。(『陳寅恪先生文史論集(上卷)』、文文出版社、一九七二年五月、三二八頁。)

(八) 「貨殖列伝」：齊魯千・桑麻、渭川千・竹。(『新釈漢文大系』第一二〇巻『史記(十四)』列伝(七)』、明治書院、二〇一四年六月、五三頁。)

(九) 「清水」：白鹿山東南二十五里。有嵇公故居。以居時有遺竹焉。(『水經注』、世界書局、一九六五年六月、一一六頁。)

(一〇) “竹林七賢”的伝説也非凭空而生、可能以某次七人的竹林聚會為原型、時間發生在前期正始九年(二四八年)的可能性最大、因為該年七賢均無官職、有可能同在山陽。而高平陵政變之后、阮籍自嘉平元年即被司馬懿辟為從事中郎、此后七賢很難全部相聚于竹林。(『竹林七賢考』、『歴史研究』、二〇〇一年五月、九七頁。)

(一一) 至於所謂竹林似乎並無一定的地点、他們七人都喜歡選擇附近各处的竹林作為集會的地方就是了。(『中国哲学史通論』、生活・讀書・新知三聯書店、一九八三年十二月、一九〇頁。)

(一二) 程峰「竹林七賢寓居“河内山陽”地望辨析」、『州大学学报(哲学社会科学版)』第四四卷第二期、二〇一一年三月。

(一三) 太宰の竹林七賢觀は史実との間に明らかな食い違いがある、具体的な資料に基づいたものではないと思われる。竹林七賢が餓死するほど貧しいというように記述する本はそもそもないであろう。

(一四) 「本朝文粹」卷十「序丙・詩序三」：蓋太上皇通世之別館也。(柿村重松注『本朝文粹』下冊、内外出版、一九二二年四月、四六二頁。)

(一五) 「本朝文粹」卷十「序丙・詩序三」：自彼遁世揖尊。(柿

村重松注『本朝文粹』下冊、内外出版、一九三二年四月、
四三九頁。）

(二六) 「本朝文粹」卷十四「願文下」…何其遁世之太疾乎。(柿
村重松注『本朝文粹』下冊、内外出版、一九三二年四月、
九八九頁。)

(二七) 島内裕子『本朝遯史』と『扶桑隱逸伝』にみる隱遁像」、
『放送大学研究年報』第十四号、一九九六年十一月、二九
頁。